南武蔵南部の横穴墓
—横浜・川崎地域—

田　村　良　照

はじめに
1．研究略史
2．分類
3．系譜と時期
4．分布
5．副葬品
6．被葬者像
7．横穴墓と火葬墓
おわりに

はじめに

筆者はかつて、川崎市内に所在する横穴墓群を調査したことを契機として、全国的にみても屈指の横穴墓分布地域である鶴見川から多摩川下流域にかけての横穴墓を対象として私見を披瀝したことがある（田村1986）。

当時は、東海地方最大の須恵器生産地である湖西古窯跡群の土器編年（後藤1989）が未確立であったことから、必然的に陶邑編年などに依拠せざるをえなくなり、研究の基礎をなす横穴墓の造営年代を明確にし得なかったことが思い出される。その意味では、湖西編年の確立が東国の横穴墓研究のみならず、七・八世紀の考古学研究に寄与した貢献度は多大なものがある。

このように湖西編年に加えて南関東各地の土器編年が整備されるにいたったことで、現在では横穴墓の造営年代がかなり明確におさえられるようになった。加えて、ここ10年で全国各地の横穴墓研究が活況を呈し、地域ごとに作成された資料集を参考にすることで、南武蔵の横穴墓の系譜をある程度色分けすることが出来るようになったと考える。

そこで、南武蔵における横穴墓研究の歩みと到達点をひろく県内外の研究者に認識していただくことを目的として本稿を起した次第である。

1．研究略史

南武蔵の横穴墓研究は明治20年、山崎直方が「橘樹郡大曽根太尾二村の横穴」すなわち現在の横浜市鶴見区大曽根町に所在する太尾神社横穴墓群を学会に紹介したことを嚆矢とする。ちょうど坪井正五郎が北武蔵の著名な吉見百穴を調査したのと同年のことであり、まさに日本の横穴墓研究の幕開けであった。

揺籃期の明治・大正年間には鶴見川下流域の岩瀬横穴墓群などが注目を集め、昭和になると同中流域の市ケ尾・小黒谷横穴墓群が石野瑛などによって調査研究された。

戦中・戦後は時勢を反映して活動は下火となるが、昭和28年に近森正によって川崎市金堀横穴墓群の調査報告書が刊行され、その４年後には横穴墓研究に市民権をあたえるきっかけとなった著名な市ケ尾横穴墓群の調査成果が甘粕健によってまとめられた。しかし忘れてならないのは、昭和30・31年に古江亮二を中心とした川崎市井田伊勢宮前横穴墓群・同金堀横穴墓群の発掘調査であろう。古江の指導のもとに郷土の歴史愛好家や教員そして高校生によってなされた発掘調査の成果は、ガリ版刷りの報告書２冊に集録され、今に伝えられている。その報告書には横穴墓や出土遺物の実測図が掲載されているが、時代背景を考慮すれば実に味わい深く、それまで学者に掌握されていた横穴墓研究が文字どおり市民権を得た記念すべき実績と、筆者は評価している。また同時期に川崎市の郷土史家・考古学研究者を会員とする高津図書館友の会によって、津田山丘陵に多数分布する横穴墓群の実態調査の成果が『たちばな18号』に報告され、南武蔵最大の密集地の一端が明らかにされた。

昭和40年代は高度成長の追い風を受け、東京のベッドタウン化を図る大規模開発がさかんに行われた。横浜市北部の港北区で、ニュータウン開発に伴う埋蔵文化財の調査が始まったのもこの時期である。

昭和50年代・60年代は調査件数・規模ともにピークに達し、横穴墓群全体を発掘した報告書が次々と刊行された。横浜市下根・天ケ谷横穴墓群、同市熊ヶ谷横穴墓群などが、その代表的なものである。また東原信行による鶴見川上流域に分布する横穴墓群の実態調査は、学問的にも、またその後の文化財保護という見地からも見逃すことは出来ない功績である。

この頃、大阪府陶邑古窯址群の報告書が刊行されたり、県内では在地土器の研究が活況を呈したことで、横穴墓の造営時期が推測できるようになったことから、横穴墓の消長をテーマにした論考がみられるようになる（池上1984、田村1986）。その後、南武蔵・相模地域で出土する大半の須恵器の供給地である静岡県の湖西古窯跡群における編年案（後藤1989）が提示されたことで、横穴墓の実年代が一層確固たるものとなり、この分野に清新な風を吹き込むことになった。さらに横穴墓の地域性に目を向けた論考が見られ出すのもこの時期からである。

平成年間になると経済の冷え込みから大規模開発は次第に下火となるが、そのなかで川崎市の久本横穴墓群や同市西前田横穴墓群から良好な土器資料が出土し、また後者の玄室棺座上より豊富な副葬品を伴った木棺が検出され衆目を集めた。

研究分野では、上田薫を中心にまとめられた『茨城県考古学協会シンポジュウム資料』が、県内の横穴墓のあり方を多角的に検討した最初の刊行物として評価される。また長年、川崎市で行政指導をするかたわら研究活動を続けてきた村田文夫は、古墳・横穴墓・火葬墓・古代寺院などを重層的に考究した『古代の南武蔵』を執筆し、それまでに累積された考古学的成果を総括するとともに、その後の研究方針を示唆された。火葬墓と横穴墓の関係については、長谷川厚と村田文夫の小論争が大変興味深い。さらに横穴墓内に描かれた線刻壁画や壁面に打ち込まれた吊金具に着目した村田文夫の一連の研究も見逃せない（村田1995・1996）。

2．分　類

横穴墓は五世紀後半に竪穴系横口式石室の影響を受けて成立したとされるが、後述するように、この墓制が南武蔵に本格的に導入されるのは六世紀後半、九州北部で発生してから約百年後のことである。この間に、横穴墓自体の変容と、横穴式石室からの波状的な影響を受けて多様な構造変化をとげていく。導入期に南武蔵でもいくつかの系統が見られるのは、このような背景によるのであろう。そして定着後にも変容は止むことなく続き、ついにはここで紹介するような本地域独自の構造も出現するのである。

〔単室構造〕

A類－玄室平面形が正方形あるいは長方形を呈し、初期のものはドーム天井であるが、時期が若干降ると前壁をもつアーチ天井のものも見られるようになる。本類には狭長な羨道の付くのが一般的である。また奥壁側に低棺座を敷設するものと無棺座のものがあり、中には造付石棺をもつＩ類や組合式石棺を内蔵するＬ類といった特殊な構造のものも存在する。

B類－玄室平面形が逆台形で、アーチ天井の構造。古式タイプには前壁をもつアーチ天井や狭長な羨道がみられるが、次第に形骸化していく。遺体安置施設はＡ類と同様。

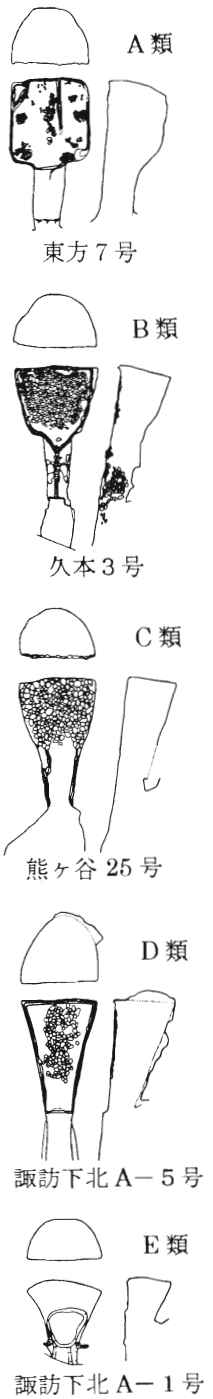
C類－前壁が退化したＢ類と考えてよいだろう。アーチ天井も玄室の羨道の区別がなくなり、せいぜい屈曲する程度に退化する。遺体安置施設は基本的にＡ・Ｂ類と同様であるが、組合式石棺は見られなくなり（注１）、造付石棺は形骸化が進行して本類の中でＪ類の高棺座に変容する。

D類－玄室と羨道の区別がなくなって両者が一体化した構造。一般的に「撥形」、「半裁徳利形」あるいは「フラスコ形」と呼称されている。無棺座のものと棺座を備えたものの二形態が存在し、後者には１ｍ前後の高棺座を付設したＫ類もある。

E類－奥行きのない小規模なＤ類と考えてよいだろう。遺体安置施設はＤ類と同様。

〔複室構造〕

F類－玄室は平面方形・ドーム天井の構造で、その前面に小規模な前室と狭長な羨道が設けられている。構造的にみて横穴式石室の影響のもとに成立したと考えられており、市ヶ尾Ｂ－16号墓以外に



第１図Ａ～Ｅ類

類例はない。

G類－撥形タイプのD類を三分割して玄室（奥室）・前室・羨道としたような構造であり、天井はアーチ状を呈する。区画部分には床面段差と框石設置溝が設けられている。南武蔵では中之橋２号墓・日向（ひなた）３号墓・早野横穴墓と図示した市ヶ尾A－６号墓の４例が確認されている。

H類－床面段差や框石設置溝が認められるなど、G類の退化形態と見てまちがいない。F・G類にくらべて類例は多く、またD類と親縁性の強い構造でもある。

〔造付石棺と高棺座〕

I類－A類横穴墓の奥壁にそって造付石棺が設けられている。「河内型」と呼ばれる南河内地方に特有な横穴墓の系譜を引くと考えられるが、天井構造などに若干の違いが認められる。

J類－C類横穴墓の奥壁側に有縁の高棺座が設けられている。天井はアーチ状を呈する。相模では数例確認されているが、南武蔵では新吉田四ッ家７号墓・真福寺２区２号墓と図示した中里１号墓の３例だけしか確認されていない（注２）。

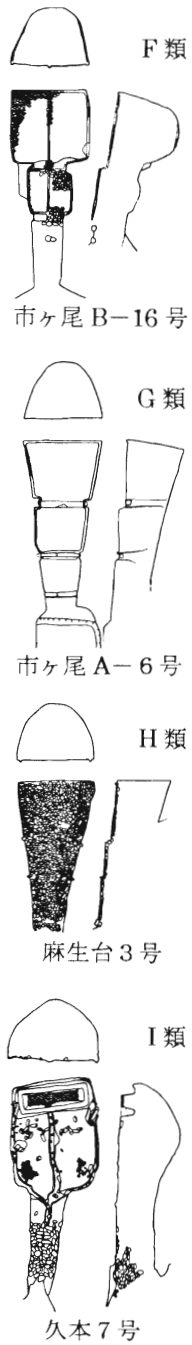
K類－「撥形」を呈する横穴墓の奥壁側に高さ１m内外の「高棺座」が設けられている。相模国鎌倉郡を中心として分布圏を形成することが解明されている（田村2000）。

〔特殊な横穴墓〕

L類－隅丸長方形平面・ドーム天井の玄室内に組合式石棺が置かれている。組合式石棺を内蔵する例は、南武蔵では図示した平瀬川隧道西際横穴墓の存在する川崎市の津田山丘陵にだけ分布し、現在までに浄元寺裏１号墓・平瀬川隧道際４号墓・同７号墓・同西横穴墓の４基が確認されている。

M類－方形平面・ドーム天井の玄室内に、側壁にそって２棺座が設けられている。このような構造の横穴墓は、図示した久地西前田２次３号墓が南武蔵では唯一の例である。

N類－玄室が長方形平面・家形天井を呈する構造を本類とした。その中で図示した荏子田（えこだ）横穴墓は、壁面に棟木や垂木・梁桁・側柱などが浮彫りに表現された希少例である。



第２図　F～I類

O類－逆台形平面で低平な家形天井を呈する玄室から、羨道そして墓道へと連絡する。最大の特徴は羨道床面よりも玄室床面が一段低くつくられている点にある。このような構造の横

穴墓は図示した上谷本Ｂ１号墓と同２号墓以外に南武蔵はおろか南関東にもいっさい見当たらない。

類例は北九州の竹並横穴墓群中に見出すことができ、時期的にはTK47～MT15型式期に位置づけられている。したがって、上谷本Ｂ横穴墓群はこれまでとりたてて評価されることはなかったが、東国への横穴墓の伝播を考える上できわめて重要である。

Ｐ類－撥形平面・アーチ天井の玄室奥壁側に棺室がつくられている。棺室構造の横穴墓は相模国鎌倉郡を中心に多数分布することから、鎌倉郡内で成立した特有な構造と考えられる。南武蔵では、図示した矢上上ノ町Ｂ１号墓と夢見ヶ崎横穴墓の２例確認されているだけである。

Ｑ類－細長いトンネル状の構造。図示した久地西前田１次１号墓以外に１例存在するだけである。

以上、南武蔵に普遍的な単室構造と、複室構造、造付石棺から高棺座へ変化するタイプ、さらには南武蔵できわめて希少な横穴墓を選び出して紹介してみた。

第３図　Ｊ～Ｍ類

３．系譜と時期

横穴墓の形態は多種多様であり、分類することはたいへん難しい。あえて本稿ではＡ～Ｑ類にわけてみたが、必ずしも十分とは言い難いことは筆者自身が感じているところである。ここでは先の分類の中で、近年の研究成果から系譜のたどれるものに焦点をあて、その造営時期を示しておきたい。

〔南関東最古の横穴墓〕

横浜市上谷本第２地区Ａ・Ｂ横穴墓群を構成する４基は、南関東地方ではまったく類例を見出せない特異な構造の横穴墓である。報告書はすでに30年以上も前に刊行されていたにもかかわらず、一般的な認識の範疇外にある構造であったことに加えて、遺物が何等出土しなかったため等閑視されたまま現在にいたった。

構造的特徴は、第一に羨道床面が玄室床面よりも高いこと、第二に家形天井で側壁との境に軒状凸起が表現されていること、第三に通有の横穴墓に見られる敷石がいずれにも存在しないこと、などが挙げられる。

結論を急ぐならば、このような構造は、北九州豊前地域の竹並横穴墓群中の六世紀前葉（T

K47～MT15型式）に位置づけられる竹並A－3号墓・同A－10号墓などにたいへんよく似ている。今後見識者による検討を要するが、かりに筆者の見解が的中しているとすれば、北九州を発生地として東漸し、六世紀後半にいたって南関東へ導入されたとする従来の横穴墓伝播論に一石を投ずることになろう。

〔河内型横穴墓〕

玄室内に造付石棺を付設したI類がこの系譜と考えられる。南武蔵・相模に見られる造付石棺内蔵の古式タイプは、天井や羨道の構造が必ずしも「河内型」と符合するわけではないが、消去法で検討するとやはりこの系譜に連なる横穴墓と判断せざるを得ない。管見では、南武蔵の西前田1次3号墓が安福寺南群18号墓に比較的よく似た構造のように思われる。

なお相模においては、造付石棺が変容して相模に特有の高棺座の出現することが論証されている（上田1989、田村2000）。資料は少ないが、南武蔵でもI類→J類→K類という流れでその過程を追うことができる。

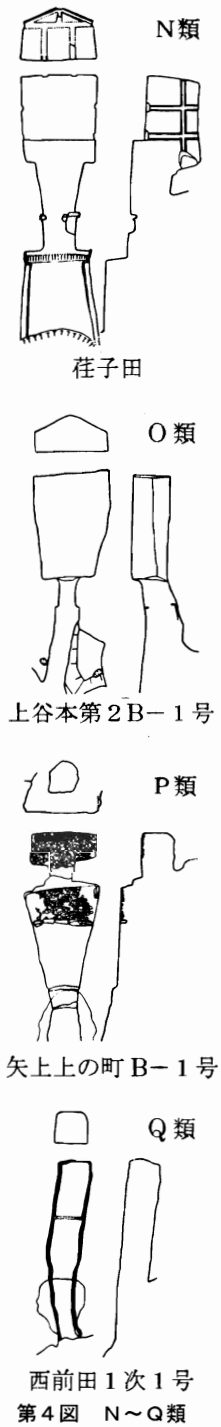
久本7号墓からこの類型としては最古の土器であるTK43～TK209型式の須恵器が出土している。したがって、畿内での盛行期（TK10型式）を過ぎたころに導入されたため故地の構造と若干異なると解釈すればとくに矛盾はないように思える。

〔組合式石棺〕

川崎市の津田山丘陵に4基確認されているだけである。系譜的には、遠江地方の菊川流域に分布するこの種の横穴墓と強い親縁性をもつと考えられている。南武蔵では造付石棺内蔵の横穴墓とほぼ同時期の六世紀後葉に出現する。

〔棺室構造〕

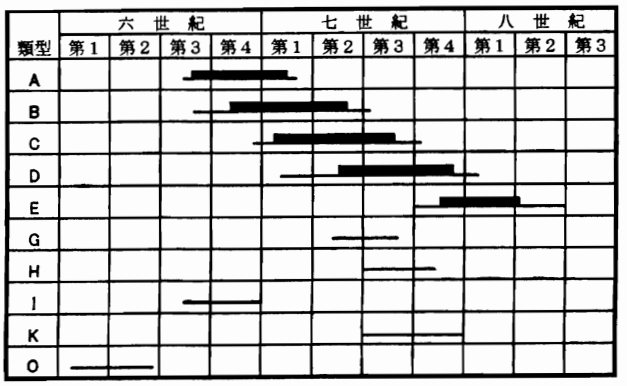
玄室奥壁に龕状の小室を設けた構造で、鎌倉郡北東部を中心として分布圏を形成している。他地域にほとんど類例を見出すことができないことから、七世紀第3四半期ごろに鎌倉郡内で考案された蓋然性が高いものと考える。なおこの構造の横穴墓は、敷石をもつ例が少なく、人骨の出土することも稀である。また規模的にも成人を伸展葬にて安置するだけの面積をもつ例はそれほど多くない。加えて、盛行する時期が七世紀後半～八世紀前葉であると見られることから、火葬骨収納を目的とした施設の可能性もある、という点も視野に入れて今後資料検討する必要があろう。



第4図　N～Q類

〔一般的構造〕

A類は玄室平面形が方形を基調とするといっても、方形あるいは縦・横長の長方形といったバラエティーをもつが、いずれも畿内・北九州に系譜をたどることができる。A類の形態が多様であるということは、裏返せば導入期にあたるためと考えてよい。それらはおおむね六世紀後葉～七世紀初頭（TK43～TK209型式）に位置づけられる。



第５図　各類型の造営時期

B類とした逆台形平面の横穴墓は従来A類の退化形と考えられていたが、西前田２次２号墓が六世紀後葉（TK43～TK209型式前半）に位置づけられることからすれば、予想以上に早く出現し、しかも定型化したかたちで他地域より導入された可能性も出てきた。

C・D・E類についてはB類の退化形と考えてよかろう。

４．分布状況

南武蔵の横穴墓分布を概観すると、きわめて偏在性のあることに気付く。この地域で現在までに、何らかのかたちで資料の残されている横穴墓群は100箇所余りに上るが、その約９割が北部の鶴見川流域から多摩川右岸に集中している。例外的に南端部の柏尾川水系の狛（いたち）川流域に濃密な分布圏が形成されているものの、この地域は古代の鎌倉郡の領域と考えられるので、分布図からも除外した次第である。

冒頭で述べたように、筆者はかつて川崎市間際（まぎわね）根・蟹ヶ谷・上作延横穴墓群を調査し報告書を作成した際に、はやくから先学諸兄によって指摘されていたこうした分布傾向について論及したことがあるが（田村1986）、その後の資料の蓄積はあってもこの傾向に大きな変化は認められない。しかし、鶴見川流域を中心に漠然と分布しているようにみえる横穴墓群も実は、濃密なところ、希薄なところ、さらには分布の確認されないところなど、ある程度の地域性、つまり第６図に示したような分布圏を形成しているのである。

①多摩川右岸地域

多摩川に注ぐ平瀬川北岸の通称長尾丘陵とその先端部の津田山丘陵に、一つの分布圏を認めることができる。とくに津田山丘陵はたかだか東西約1.5km、南北約500mの独立丘陵にもかかわらず、その山腹には18箇所の横穴墓群がところ狭しと群集し、分布密度では南武蔵随一をほこる。

この地域において現在までに検出された横穴墓は100基余りであるが、そのうち形態のわかるものは89基を数える。それらは必ずしも先の分類に符合するものばかりではないが、あえて近い類型にあてはめた場合、A類31基、B類27基、C類15基、D類５基、複室構造のG類２基、造付石棺内蔵のＩ類３基、組合式石棺内蔵のＬ類４基（１基は家形のＮ類にも該当する）、南武蔵で唯一の両側壁に棺座を設けたＰ類１基、Q類１基という内容である。

南武蔵にかぎらず相模でもＡ・Ｂ類は数が少なく、Ｃ・Ｄ類が過半数を占めるのが普遍的なあり方であるが、本地域は古式のＡ・Ｂ類が圧倒的に多い。つまり、六世紀後葉～七世紀前葉の出現期から定着期にかけて盛んに造墓されるが、一般的な盛行期である七世紀中葉～後葉には下火となるのである。また、遠江や河内さらには九州北部に故地の求められるI・Ｌ・M類が比較的多く見られるのも、本地域が初現期における中心地であったことを物語っているのであろう。

②矢上川上流域

川崎市中央部を東流したのち、南下して鶴見川本流へと合流する矢上川上流域に小分布圏が形成されている。ちなみに、この地域には橘樹郡の郡寺と目されている古刹影向寺（ようごじ）が存在し、その近郷に郡衙の存在が有力視されている。

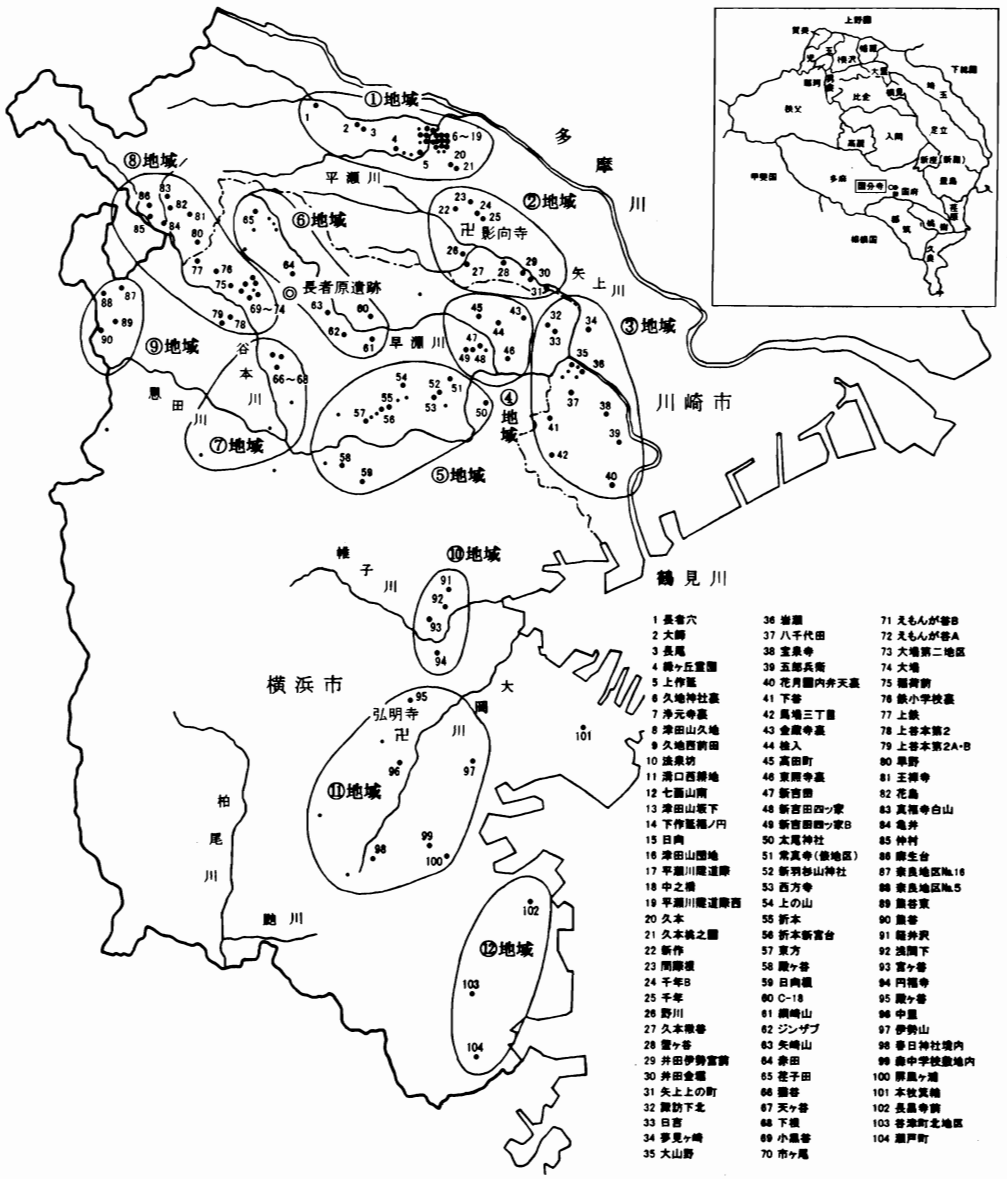
現在までに10横穴墓群が確認されており、そのうち間際根（まぎわね）・蟹ヶ谷・楸谷（ひさぎだに）・千年（ちとせ）Ｂ・伊勢宮・金堀・矢上上ノ町横穴墓群が調査報告されている。構造のわかる23基を分類すると、A類９基、Ｂ類５基、Ｃ類３基、Ｄ類５基、Ｅ類１基という内訳となり、Ａ・Ｂ類といった古式のタイプが多く、①地域と似たような傾向を示している。しかし、①地域では新しいタイプのＣ・Ｄ類はほとんど認められなかったのに対し、本地域では一定の割合で存在し、かつ最終末の形態であるＥ類も１基存在するなど、①地域に比べれば新しい様相がうかがえる。

③矢上川下流域

矢上川と鶴見川本流との合流点付近に15箇所の分布が知られており、そのうち諏訪下北・夢見ヶ崎・八千代田・馬場三丁目横穴墓群が報告されている。形態のわかるものは16基あり、Ａ類１基、Ｂ類１基、Ｄ類５基、Ｅ類１基と、高棺座の付設されたK類７基、棺室のあるＰ類１基という内容で、七世紀後半以降の横穴墓が大半を占め、①・②地域とはだいぶ様相が異なる。また高棺座や棺室をもつ横穴墓が本地域にきわだって分布している点は興味深く、この種の横穴墓の故地である相模国鎌倉郡との人的交流が想定される。

④早淵川下流域

早淵川が鶴見川（谷本川）と合流する附近に６箇所の分布が確認されている。その中で、高田町・新吉田四ッ家・新吉田四ッ家Ｂ横穴墓群が報告され、合計10基の構造が判明している。その内訳はA類４基、Ｃ類２基、Ｄ類２基、退化した複室構造のH類１基、高棺座のＪ類１基というもので、古式のものから比較的新しい時期のものまでほぼ均一に認められる。その中で新吉田四ッ家７号横穴墓は、構造的にＪ類でも最古のものと考えられる。



第６図　横穴墓分布図

⑤鶴見川中流域

鶴見川が大きく北に蛇行する折本から新羽にかけての地域に15箇所の分布が知られている。その中で調査・報告されている常真寺・上の山・折本新宮台・東方（ひがしかた）横穴墓群などで18基の構造が把握されている。その内訳はＡ類７基、Ｂ類７基、Ｃ類４基、Ｅ類１基というもので、六世紀後葉～七世紀前葉にかけての古式の横穴墓が過半数を占めているのが特徴である。

⑥早淵川上中流域

11箇所の横穴墓群が知られている。その中で報告されているのは荏子田（えこだ）横穴墓とC-18横穴墓群だけであるが、すでに発掘調査が実施され大規模に展開することの判明している矢崎・綱崎山・赤田横穴墓群の報告書刊行に期待がかかる。現状では８基の構造が明らかで、Ｂ類１基、Ｃ類３基、Ｄ類２基、Ｅ類１基と家形のＮ類１基という内容であり、Ａ類が見られない上に最終末期のＥ類が存在するなど、比較的新しい時期の横穴墓が多い地域と言えそうだ。

⑦谷本川（鶴見川本流）と恩田川の合流点付近

７箇所の横穴墓群によって小分布圏が形成されている。その中で⑧地域に寄ったところに位置する天ヶ谷・下根横穴墓群の発掘調査で11基の構造があきらかになっており、Ｂ類１基、Ｃ類２基、Ｅ類1基、退化した複室構造のＨ類６基、古式高棺座のＪ類１基という内訳である。この２横穴墓群に限ってのことかもしれないが、Ｄ類がまったく見られず、かわってＤ類と時期・構造において親縁性の強いＨ類がきわだっている。全体としてはＡ類が欠如する一方、Ｅ類が存在するなど、比較的新しい時期の横穴墓が目立つ地域といえよう。

⑧谷本川中・下流域

谷本川下流の市ケ尾周辺から町田市境にかけての範囲に19箇所の横穴墓群が分布している。加えて中流域では対岸の町田市側にも４箇所分布することが知られており、南武蔵では①地区に次ぐ大分布圏が形成されている。この地域には著名な市ケ尾横穴墓群や稲荷前古墳群が存在することから、学会においてはやくから注目されていたことも幸いし、下流域では市ケ尾・小黒谷・大場・稲荷前・上谷本第２・上谷本第２Ａ・Ｂなど６横穴墓群、中流域では早野・麻生台の２横穴墓群の発掘調査が実施され、報告書も刊行されている。さらに王禅寺・花島・真福寺白山・亀井・仲村の５横穴墓群は実態調査がなされ、ある程度の様相が判明している。

構造的には、Ａ類３基、Ｂ類10基、Ｃ類20基、Ｄ類10基、Ｅ類１基、複室構造のＦ類２基、Ｇ類４基、Ｈ類２基、古式高棺座のＪ類１基、家形天井で羨道床面が玄室のそれよりも一段高い構造のＯ類２基、さらにトンネル状を呈するＱ類１基という内容で、実に多種多様である。すでに述べたように、南関東最古の可能性が高いＯ類や複室構造のＦ類の存在は光彩を放っており、また古式高棺座のＪ類の存在も看過できない。

一般的構造ではＢ類・Ｃ類が多いことから、六世紀末～七世紀中葉にかけて盛行した地域であることがわかる。

⑨恩田川中流域

左岸に、奈良地区№５・同№16・熊ヶ谷東・熊ヶ谷の４横穴墓群が分布し、いずれも発掘調査後すみやかに報告書が刊行されている。

25基の構造が判明しており、Ａ類１基、Ｂ類１基、Ｃ類11基、Ｄ類12基という内容から七世紀中葉～後半にかけて盛行期があるようだ。

⑩～⑫横浜市南部

帷子（かたびら）川流域に４箇所、大岡川流域に９箇所、海岸部に４箇所の計17横穴墓群が周知されているが、発掘調査の実施されたのは浅間下・中里・長昌寺前・谷津町北地区・瀬戸町の５横穴墓群だけである。14基の構造が明らかで、Ａ類３基、Ｂ類３基、Ｃ類５基、Ｄ類２基、古式高棺座Ｊ類１基という内容であり、七世紀前半～中葉に盛期を迎える様相がうかがえる。またＪ類が見られるのは鎌倉郡に近いという地理的要因によろう。

〔郡衙と横穴墓分布〕

第６図右上に南武蔵六郡の想定図を貼付した（注３）。本稿で対象とした南武蔵南部（都筑・橘樹・久良）について横穴墓分布図と対比すれば、まず国境は帷子川・大岡川と柏尾川の分水嶺にそった位置に定められており、横浜市側にだいぶ食い込んでいることがわかる。したがって柏尾川水系の狛（いたち）川流域に濃密に分布する横穴墓群は相模国鎌倉郡に帰属することになる。この点は構造や分布のあり方を検討した拙稿によって実証ずみである（田村2000）。また都筑郡と橘樹郡の郡境はほぼ④地域と⑤地域の間に想定されている。

南武蔵南部では横穴墓の造営期にあたる七世紀に都筑・橘樹・久良の３郡が設けられていたとされるが、都筑郡衙跡と想定される長者原遺跡の発見、橘樹郡の郡寺と目される影向寺の総合調査と周辺での郡衙関連遺跡の発見、さらには神奈川県考古学会の企画による「かながわの古代寺院」の検討（岡本・伊丹2001）をへて郡衙・郡寺の実相が一層鮮明になってきた。
そこで横穴墓分布図に長者原遺跡と影向寺、および久良郡衙との関連が指摘される弘明寺（ぐみょうじ）を印してみた。

以上の点を踏まえると、南武蔵の横穴墓群は各郡衙を中心に分布圏を形成しているように見受けられる。そして３郡を比較すれば、都筑・橘樹郡は横穴墓の造営が盛んであったが、久良郡は積極的であったとは言い難い状況が看取できる。ちなみに南接する鎌倉郡や三浦郡は相模でも卓越した横穴墓分布域であることを勘案すると、こうした横穴墓造営のさかんな地域に囲まれて、一人希薄な状況のうかがえる久良郡の存在に歴史的背景の複雑さを思料させられる。

５．副葬品

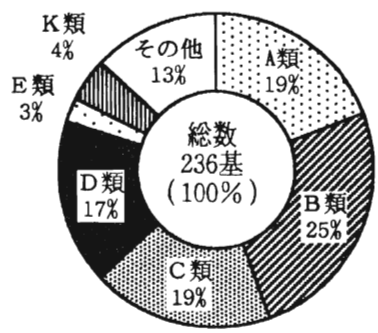
南武蔵の横穴墓の中には、同時期の中小古墳と同等の副葬品をもつ例が少なからず存在する。例えば、玉類・耳環・釧などの装身具、直刀・鏃などの武器類、そして須恵器・土師器などの供献土器といったものがその代表的なものであり、なかには頭椎太刀（平瀬川隧道際西横穴墓）、銀象嵌太刀（久本３号墓）、銅鋺（浄元寺裏１号墓・日向３号墓）、埴輪（津田山久地西５号墓・井田金堀２号墓）などの出土例も報告されている。

第６図は南武蔵の横穴墓から出土した副葬品のあり方を具体的にする意味で集成を試みたものである。対象とした横穴墓は基本的に構造がある程度把握できるもの、すなわち形態分類可

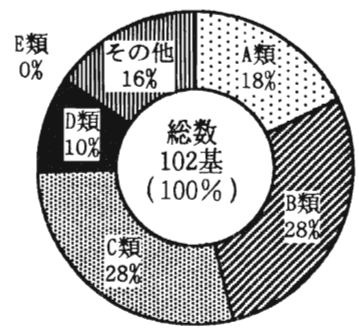
能なものに限ったが、横穴墓が未開口か否かという点に関しては拘泥していない。したがってなかには盗掘後に長期間開口していて、主要な副葬品が持ち去られたと思われるような横穴墓も含まれている。

品目別に見ると、須恵器・土師器・直刀・鉄鏃・刀子・玉類・耳環などが全体（102基）の３～５割の横穴墓から出土しており、主要品目といえる。その他には石製紡錘車４点、砥石と埴輪が各２点、銅鋺と銅釧が各１点という内容である（注４）。客体的な副葬品の中では、例えばＡ類や造付石棺内蔵のＩ類といった六世紀後葉～七世紀初頭の古式横穴墓に限って石製紡錘車が出土しているなど、時期ごとの副葬傾向を垣間見ることができる。

南武蔵では236基の横穴墓が先の形態分類にあてはまり、そのうち102基に副葬品が伴う。すなわち約44％（102基÷236基）が副葬品をもっており、これが全体の保有率ということになる。それではこの全体保有率を基準として各類型のあり方を比較してみよう。一般的構造のＡ～Ｅ



形態比率



副葬品保有率

類型	横穴(全体)	横穴(副葬品)	須恵器	土師器	直刀	鉄鏃	刀子	玉類	耳環	紡錘車	砥石	埴輪	銅釧	銅鋺
A	45 (19%)	18 (18%)	3	7	12	10	3	5	0	1		2		
B	60 (25%)	29 (28%)	11	11	14	12	7	9	15		2		1	
C	44 (19%)	29 (28%)	11	6	7	6	7	9	10					
D	40 (17%)	10 (10%)	4	2	2	7	4	2	2					
E	6 (2.5%)	0												
F	2	0												
G	3	4	1	1	2	3	3	3	2					1
H	6 (2.5%)	2		1	1	1	1	1	1					
I	4	4	2	1	3	3	2	1	2	3				
J	2	0												
K	10 (4%)	1	1					1						
L	2	4			3	3		1	1					
M	1	1			1	1	1	1	1					
N	4	0												
O	2	0												
P	2	0												
Q	3	0												
計	236 (100%)	102 (100%)	33	29	45	46	28	32	34	4	2	2	1	1

単位：基

第７図　形態比率と副葬品集計

類では、A・B類が40%代でほぼ基準に近い値を示すが、C類は65%、D類は25%、E類は0%という結果である。これを単純に受け止めれば、七世紀前半～中葉の横穴墓が最も多くの副葬品を保有し、七世紀後葉になるにつれて次第に減少傾向を示し、八世紀前半の造営が想定されるE類にいたってはまったく認められなくなると理解できる。より詳細にみるならば、D類の盛行する七世紀第４四半期になると副葬品はほとんど認められなくなるようだ。要約すれば、南武蔵では七世紀中葉に副葬習慣転換の兆しが見え出し、第３四半期の中で次第に浸透し、第４四半期には横穴墓に副葬品を納める習慣がほぼ途絶えるということを示していると考えられる。

南関東地方の横穴墓から出土する副葬品の変化に着目した研究者の一人に鈴木敏弘がいる。氏の見解によれば、七世紀第３・４四半期の境頃に急速に副葬習慣が衰退し、その背景に中央からの規制（政策）があったとされる（鈴木1995）。中央からの規制の有無にまでは言及しえないが、南武蔵でも確かに七世紀第３四半期を中心とした時期に副葬習慣の画期を想定できそうだ。ちなみに筆者が検討した相模では、七世紀前半の中で変化が生じ、同中葉にいたって顕在化する。そして主要な副葬品の一つである玉類は、未開口の横穴墓でさえも首飾りや腕飾りにするだけの数が七世紀第３四半期になると出土しなくなり、実用的なものから象徴的なものへと変質する過程がうかがえる。したがって副葬習慣衰退の背景には、政治的規制とともに葬送観念自体の変化も視野に入れておく必要があるだろう。

畿内では耳環や須恵器の副葬は七世紀中葉まで続く（広瀬2000）とされるから、後期古墳文化を象徴する副葬習慣の変化は七世紀第３四半期ごろに列島規模で顕在化する現象であることは疑いない。

６．被葬者像

〔研究史〕

横穴墓研究の先進地の一つである南武蔵・相模地域では、戦後の復興期を経て考古学研究が再びさかんになる昭和30年ごろから、この課題に取り組んだ論考が見られるようになる。ここではそれらを逐一とりあげることはできないので、昭和60年ごろまでに集積された考古資料や有力な論考から被葬者像を絞り込んだ竹石健二の見解（竹石1986）を参考にすると、横穴墓にはつぎのような人々が葬られたと考えられる。

a．古墳の被葬者より低い階層とする見解

b．家父長制的世帯共同体の構成員とする見解

c．郡司・里長・戸長などとする見解

d．族長または具体的氏族の構成員とする見解

e．特殊技術者集団の構成員とする見解

これらの説はとくに有力に支持するものがない一方、否定もできない。ということは裏返せば、横穴墓の被葬者は古墳被葬者よりは下位であるが一般庶民ではない、つまり一定の階層を構成し、しかも多様な系統・職掌にあった人々であったことを物語っていると考えられる。したがって今後の研究の進展をみたとしても、被葬者像を逐一つまびらかにすることは困難であろう。それでも近年、横穴墓の地域性すなわち系譜が次第に明らかになってきたことで、この方面から被葬者像の一端を想定することができるようになった。その好例がつぎに述べる「河内型」とその被葬者である。

〔河内型横穴墓とその被葬者〕

近時、横穴墓研究が全国的な規模でなされるようになったことにより、各地に特有の横穴墓のあることが広く知られるようになった。たとえば、九州の「肥後型」、山陰の「意宇(おう)型」あるいは畿内の「河内型」などがその代表的なものである。こうした情報を念頭において南武蔵・相模地方の横穴墓を見てゆくと、他地域に故地の求められる構造の横穴墓が少なからず分布することがわかる。本稿でもすでにそのいくつかを紹介したが、それらは出現期の六世紀後半に確認され、大半は定着することなく短期間で姿を消すなかで、「河内型」だけは同時多発的に出現し、その後も存続し独自の発展をとげるのである。

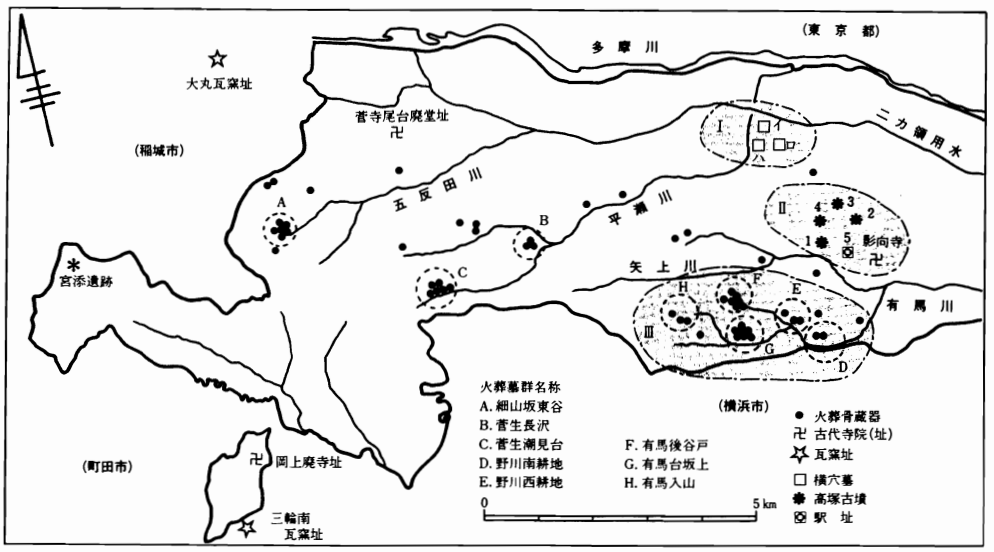
「河内型」横穴墓は矩形玄室内に造付石棺を内蔵することを最大の特徴とするもので、六世紀ごろ河内に居住していた渡来系氏族の墓域として高井田横穴墓群や安福寺横穴墓群が形成されるが、それらの中で主体的につくられた構造の横穴墓であった。このタイプは東海地方や南関東地方などに散見され、なかでも南関東の南武蔵・相模・上総地域に多数分布することが知られている。つまり考古学的成果から、南関東各地に河内出身あるいはその一族とみられる渡来系氏族の入植したことをある程度想定することができるのである。

文献史学の方面において、『続日本紀』神護景雲二年（768）の条から河内国安宿(あすか)郡出身と考えられる飛鳥部吉志五百国という人物が武蔵国橘樹郡に居住していたことが知られていたが、加えて近年、茅ヶ崎市居村Ｂ遺跡出土の木簡によって相模川西岸にも飛鳥部吉志や春日（春日部）氏のいたことが明らかになった。それらの文字資料はどちらも八世紀のものであるが、六・七世紀にさかのぼって河内出身の渡来系氏族が南関東に移入した公算は大きく、彼らの奥津城が河内型横穴墓であったとする須藤智夫氏の見解（須藤1995）はかなり信憑性が高いと筆者は考えるのである（注５）。

このように考古学と文献史学の両分野から得られた資料を結びつけることで、南関東でも横穴墓の被葬者像の一端がかなり鮮明になってきたように思える。

７．横穴墓と火葬墓

南武蔵では終末期古墳の資料が不足がちであるため、畿内の高安山墳墓群に見られるような



イ．久地浄元寺横穴墓（銅椀）ロ．下作延日向横穴墓（銅椀 ハ．平瀬川ずい道際横穴墓（頭椎太刀）
1．馬絹古墳　2．西福寺古墳 3．法界塚　4．宮崎大塚　5．推定小高駅址

第８図　火葬骨蔵器・寺院址・横穴墓・高塚古墳等等関連図（村田・増子1990より転載）

古墳からか火葬墓へと段階的に移行する好例は挙げられない（注６）。したがって必然的に横穴墓と火葬墓との関係に関心が集まるのだが、幸いなことに南武蔵の中で現在の川崎市にあたる橘樹郡には、古代の火葬墓が多数分布することで早くから注目されていた。一方、この地域に横穴墓が濃密に分布することはこれまで見てきたとおりである。

このような歴史的環境はいかに生じたのか、つまり両墓制の関係についてはじめて本格的に論じたのが村田文夫・増子章二であった。両氏は農作業中に突発的に発見され、そのまま収蔵庫に眠っていた資料を整理検討し、この地域の火葬墓研究に先鞭をつけた（村田・増子1980）。

その成果を踏まえて、古墳・横穴墓と火葬墓の関係について論及したのが長谷川厚であった。氏はこの地域の横穴墓に銅鋺の見られる点に着目し、被葬者の中には中央政権が支配層と認知するほどの階層が含まれていたと主張した。さらに、横穴墓と火葬墓という二つの異なった墓制が八世紀前葉でリンクすると考え、それらの要素をもって横穴墓被葬者の一部の階層が初期火葬墓の被葬者になったと論じた（長谷川1987）。

これに対して村田・増子は、先の資料を研究者のすべてが共有できるようにつぶさに紹介した上で、総合的考察を試みた。その論旨は第８図に示されたように、橘樹郡内における古墳（Ⅱ地域）・横穴墓（Ⅰ地域）・火葬墓（Ⅲ地域）の分布域は決して重なっていない点を強調し、長谷川の見解には無理があるというものであった。また影向寺（推定．橘樹寺）を建立したのはⅡ地域を分布圏とする主要古墳の被葬者の後裔であって、火葬墓の被葬者やその一族ではないとしている（村田・増子1990）。

第６図と第８図を比較すると、確かに火葬墓はそれまで古墳・横穴墓の空白地であった矢上

川と有馬川に挟まれたところを選んで造営されたように見受けられる。しかし、それでは古墳・横穴墓の被葬者の後裔は八世紀以降にどんな墓をつくったのかという素朴な疑問が生じてくる。筆者は確たる自説を持たないので暗に疑義を提示するだけであるが、この論争が続き、近い将来に光明の射すことを期待したい。

その後の研究の動向は、神奈川県考古学会の企画による講座「かながわの古代寺院址」の成果から、南武蔵・相模では七世紀第４四半期～八世紀第１四半期に、郡を単位とする範囲に古代寺院の創建されることがわかってきた。また相模では、大磯町後谷原（あとやはら）横穴墓群や藤沢市森久（もりきゅう）横穴墓群の資料から、八世紀中葉までに横穴墓の機能が完全に停止することが明らかになった。さらには、六～八世紀をとおして渡来系氏族が常に見え隠れしている点も注意を引く。

このように、村田・長谷川の論争以降も徐々にではあるが、両墓制の関係を解明するヒントが出てきており、今後の研究の進展に興味が持たれる。

おわりに

六世紀前半に起こったとされる武蔵国造の争乱後、大和政権は本格的に東国経営にのり出し、その一施策として南武蔵に屯倉を設置し、管掌者・技術者として渡来系氏族を移住させ、その結果横穴墓という新来の墓制が将来されたと、森田悌をはじめとする古代史家の多くは考えている（森田1992）。しかし集積された考古学資料を分析すると、古代史家の学説には考古学的成果を十分に理解していない節が見受けられる。こう言ってしまうと、古代史家が自説を優位に導くために資料を牽強付会しているという図式に写ってしまうが、実はそうではなく、考古学研究者側からの正確な情報発信が不十分なため、古代史家に誤解を与えてしまっているというのが真実であろう。

こうした思い入れが深層にあって本稿を起こしたわけであるが、なにぶん浅学故、抱いていたほどの内容とはなり得なかったが、17年ぶりに南武蔵の横穴墓について研究の到達点を私見を交えて紹介した次第である。なお、明治20年に始まる南武蔵の横穴墓研究の足跡を本稿末尾に集成してみた。見落としもあろうとは思うが、研究活動の一助になれば望外の喜びである。

最後に、本稿を執筆するにあたり滝澤亮氏には大変お世話になり、また妹尾周三氏からは有益な御教示をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。

注

1．組合式石棺内蔵の浄元寺裏１号墓はＣ・Ｄ類の可能性もあるが、形状がはっきりしないので除外して考えた。なおこの横穴墓からは銅鋺が出土している。
2．新吉田四ッ家７号墓はＡ類に高棺座の付設された構造で、高棺座をもつタイプとしては南武蔵最古に位置付けられる。
3．村田文夫　1993『古代の南武蔵』の155頁の図を転載させていただきました。

4．銅鋺出土の浄元寺裏１号墓は横穴前半部を失い形状がはっきりしない。また銅鏡出土の軽井沢横穴墓も筆者自身が実態を把握し得なかった。したがって、この２横穴墓は副葬品集計表に掲載してない。
5．居村Ｂ遺跡に近い寒川町越の山横穴墓群には、六世紀後葉に遡る造付石棺内蔵の横穴墓が検出されている。またこの地域には七世紀後半の建立が想定される下寺尾廃寺が存在し、さらに郡の役所の存在も想定されている（岡本2001）。
6．高安山墳墓群ではまず七世紀後半～末に磚槨を埋葬施設とする方墳が築かれる。ついで奈良時代前半には墓誌や皇朝十二銭を納めた方形区画の土坑墓がつくられ、そしてついには火葬墓にかわり、その後十世紀まで蜒々と続けられる。被葬者については官僚層のような人物と考えられている（河上1996）。

引用・参考文献

甘粕　健　1957　「横浜市市ケ尾遺跡群調査の概況」『私たちの考古学』12　考古学研究会
荒井秀規　1990　「古代相模の渡来人と帰化人」『三浦古文化』第48号　三浦古文化研究会他
池上　悟　1980　「横穴墓」『考古学ライブラリー』６　ニュー・サイエンス社
池上　悟　2000　「日本の横穴墓」『考古学選書』　雄山閣
上田　薫　1989　「高棺座について」『神奈川考古』第25号
大分県考古学会　1991　「特集　日本の考古学」『おおいた考古』第４集
神奈川県考古学会　2001　「かながわの古代寺院」『考古学講座』
河上邦彦　1996　「飛鳥の古墳」『飛鳥学総論』　人文書院
神澤勇一　1989　「大磯丘陵横穴墳墓群(1)」神奈川県立博物館　第18号
九州古墳文化研究会　2001　『九州の横穴墓と地下式横穴墓』
後藤健一　1989　「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』　湖西市教育委員会
杉山晋作　2000　「古代東国における渡来系集団」『考古学ジャーナル』№459　ニュー・サイエンス社
鈴木敏弘　1995　「東国古墳の終焉と横穴墓」『和考研究』第３集
須藤智夫　1995　「古墳時代相模における在地社会の一様相」『考古学の世界』第10号　学習院考古会
竹石健二　1986　「横穴墓の被葬者」『季刊考古学』第16号　雄山閣出版
田村良照　2000･2001　「相模の横穴墓（１）（２）（３）」『湘南考古学同好会会報』第80号、第83号、第84号
戸田和美　2001　『東海の横穴墓』　静岡県考古学シンポジウム2000
寺田兼方　1996　『藤沢市川名森久地区埋蔵文化財発掘調査書』
富永富士夫　1989　『居村「放生木簡」シンポジュウムの記録』神奈川地域史研究会
長谷川　厚　1983・1987　「歴史時代墳墓の成立と展開（１）（２）」『古代』第75・76合弁号、84号　早稲田大学考古学会
花田勝広　1990　「河内の横穴墓」『考古学論集』第３集　考古学を学ぶ会
広瀬和夫　2000　「特集　副葬を通してみた社会の変化」『季刊　考古学』第70号　雄山閣
古川一明　1996　「北辺に分布する横穴墓について」『考古学と遺跡の保護』甘粕健退官記念論集刊行会
水野正好　1989　「河内飛鳥と漢・韓人の墳墓」『古代を考える　河内飛鳥』　吉川弘文館
村田文夫・増子章二　1989・1990　「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究(上)・(下)」『川崎市民ミュージアム紀要』第２・３集
村田文夫　1995　「横穴式石室・横穴墓内を垂下する布帛」『みちのく発掘』菅原文也先生還暦記念論集
森田　悌　1992　『古代東国と大和政権』　新人物往来者
山尾幸久　1989　「河内飛鳥と渡来氏族」『古代を考える　河内飛鳥』　吉川弘文館

南武蔵の横穴墓関連資料

1　山崎直方　1887　「武蔵橘樹郡大曽根太尾二村の横穴」　東京人類学会雑誌　第21号
2　阿部正功　1894　「武蔵ニ於ケル貝塚・横穴・其他遺跡地名表」　東京人類学会雑誌　第96号
3　八木奘三郎　1900　「雑録（154）」　東京人類学会雑誌　第170号
4　大野延太郎　1908　「武蔵国駒岡新発見の横穴」　考古界　第７編第８号
5　和田千吉　1909　「武蔵国駒岡の古墳発掘」　考古界　第８編第６号
6　小松真一　1922　「武蔵国南部の横穴群に就いて」　人類学雑誌　第37巻第６号
7　石野　瑛　1924　『武相の古代文化』
8　石野　瑛　1926　「横浜及び付近の古墳と横穴」　考古学雑誌　第16巻第２号
9　大野延太郎　1926　「武蔵国駒岡の横穴に就いて」　武蔵野　第８巻１号
10　八幡一郎　1926　「鶴見花月園内に発見された横穴」　武蔵野　第８巻３号
11　谷川盤雄　1927　「家形彫刻を有する横穴」　考古学雑誌　第17巻第１号
12　高橋光蔵　1928　「神奈川県都筑郡山内村石川の家形彫刻を有する横穴」　史蹟名勝天然記念物　第３巻第７号
13　白井光太郎　1932　「武蔵国久良郡石川中村穴居記」　ドルメン　６（９月号）
14　石野　瑛　1933　「武蔵国都筑郡中里村市ヶ尾横穴群調査報告」　考古学雑誌　第23巻第７号
15　江坂輝弥　1942　「旧神奈川県山内村荏田・小黒谷横穴古墳群調査略報」　民族文化　第４巻第２号
16　近森　正　1953　「金掘山横穴古墳発掘報告」　Archaeology　18号
17　古江亮二ほか　1955　『川崎市井田伊勢宮前横穴群調査記』　川崎市教育委員会、市立川崎・橘高校
18　佐藤善一　1956　「横浜市元石川下谷横穴古墳」　国大考古学会会報　43号
19　古江亮二ほか　1956　『川崎市井田伊勢宮金掘横穴群第７号穴調査書』　川崎市教育委員会・市立橘高校
20　甘粕　健　1957　「横浜市市ヶ尾遺跡群調査の概況」　私たちの考古学　第３巻第４号
21　高津図書館友の会　1957　「津田山久地横穴古墳群清掃調査」　たちばな　第18号
22　岡田清子　1957　「古代東国の一村落－横浜市港北区市ヶ尾遺跡の発掘」　歴史地理教育　23号
23　石野　瑛　1957　「横浜市折本横穴墓群」　日本考古学年報　第５号
24　坂詰秀一　1957　「横浜市港北区東方の横穴」　立正考古　11・12号
25　甘粕　健　1958　『横浜市史』　第１巻
26　石野　瑛　1958　「横浜市磯子区森町（離山）蛇山横穴群　日本考古学年報　第７号
27　二戸芳雄　1960　「川崎市・新作の横穴古墳」　立正考古　15号
28　石野　瑛　1961　「横浜市元石川町荏子田かんかん穴横穴」　日本考古学年報　第９号
29　石野　瑛　1961　「横浜市港北区市ヶ尾横穴Ｃ群」　日本考古学年報　第９号
30　後藤守一　1961　「多摩丘陵地域における古墳及び横穴の調査」　東京都文化財調査報告書　10号
31　二戸芳雄　1961　「横浜市港北区元石川の横穴」　立正考古　17号
32　和島誠一　1961　「神奈川県横浜市港北区市ヶ尾遺跡群」　日本考古学年報　第９号
33　石野　瑛　1962　「神奈川県横浜市浅間神社境内横穴群」　日本考古学年報　第11号
34　二戸芳雄　1962　「川崎市新作に於ける横穴」　立正考古　20号
35　村田文夫　1962　「横浜市港北区元石川の横穴古墳群」　立正考古　21号
36　新井　清　1962　「川崎市下作延中之橋横穴群発掘調査報告」
37　新井　清　1963　「川崎市下作延津田山附近に於ける石棺を伴う横穴の発見について」　たちばな　第27号
38　宮島　操　1964　「川崎市下作延津田山坂下横穴古墳群発掘調査報告」　高津郷土資料集　第２篇
39　清水潤三　1966　「神奈川県横浜市日吉横穴」　日本考古学年報　第14号
40　高津図書館友の会　1966　「川崎市津田山横穴群概要」　考古たちばな第５・６合弁号

41 伊東秀吉 1966 「川崎市下作延日向高横穴古墳調査報告」 川崎市文化財集録 第２集
42 岡本・小宮 1968 「稲荷前古墳群の発掘調査概要」 昭和42年度横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書
43 岡本 勇ほか 1968 「朝光寺原Ａ地区遺跡第１次発掘調査略報」 横浜市北部埋蔵文化財調査委員会
44 赤星直忠 1970 「神奈川県における横穴古墳の線刻壁画」 考古学ジャーナル48号
45 伊東秀吉 1970 「川崎市生田・長者穴横穴古墳調査報告」 川崎市文化財集録 第５集
46 釜口・佐藤 1971 『上谷本第２地区（横穴古墳群）調査報告書』 横浜市埋蔵文化財調査委員会
47 合田芳正ほか 1971 『上谷本第２遺跡Ａ地区・Ｂ地区発掘調査概報』 中央大学考古学研究会
48 佐藤・井上 1971 「横浜市港北区高田町遺跡調査報告」 昭和45年度横浜市埋蔵文化財調査報告書（２）
49 井上義弘 1971 「横浜市金沢区富岡町長昌寺前横穴群発掘調査報告」 横浜市埋蔵文化財調査報告Ⅲ
50 神沢勇一 1971 「森中学校敷地内横穴墓」 神奈川県立博物館発掘調査報告５
51 井上義弘 1972 「横浜市鶴見区駒岡遺跡群（八千代田横穴群）報告」 昭和46年度横浜市埋蔵文化財調査報告
52 高山・佐々木 1972 『桧入横穴古墳発掘概報（事業報告）』
53 池上 悟ほか 1973 『横浜市緑区荏田町小黒谷遺跡発掘調査概報』 中央大学考古学研究会
54 上野・島田 1973 『小黒谷遺跡発掘調査概報』 中央大学考古学研究会
55 樋口・金子 1974 「川崎市多摩区早野横穴古墳発掘調査報告」 川崎市文化財集録 第９集
56 樋口・金子 1974 「神奈川県早野横穴の調査」 考古学ジャーナル 第91号
57 坂本 彰 1977 「横浜市矢崎山の調査」 第１回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨
58 榊原・米沢 1977 「殿ヶ谷横穴古墳」 日本考古学年報 第28号
59 東原信行 1978 『川崎市多摩区麻生台横穴古墳発掘調査概報』 日本住宅公団
60 青木健二 1979 「市ヶ尾・川和地区内遺跡群」（下根・天ヶ谷横穴群） 日本窯業史研究所報告 第８冊
61 村田・増子 1980 「南武蔵における古代火葬骨蔵器の一様相」 川崎市文化財調査集録 第15集
62 東原信行 1980 「川崎市高津区下作延福ノ円横穴発掘調査報告」 川崎市文化財調査集録 第15集
63 池上 悟 1980 『横穴墓』 ニュー・サイエンス社
64 岡本孝之 1981 「中屋敷横穴墓調査報告」 神奈川県埋蔵文化財調査報告 21
65 東原信行 1981 「川崎市夢見ヶ崎横穴墓発掘調査報告」 川崎市文化財集録 第17集
66 佐藤安平 1982 『横浜市西区浅間下横穴群調査概報』 同調査団
67 甘粕 健ほか 1982 『横浜市史』 資料編21
68 竹石健二 1982 「津田山丘陵の横穴墓について」 日本大学人文科学研究所 研究紀要26号
69 東原信行 1983 「川崎市西北部谷本川流域の横穴古墳群」 川崎市文化財調査集録 第20集
70 長谷川 厚 1983 「歴史時代墳墓の成立と展開（１）」 古代 第75・76号弁号
71 池上・遠藤 1984 『神奈川県横浜市緑区奈良町・熊ヶ谷東遺跡発掘調査概報』 同調査団
72 池上・遠藤 1984 『武蔵・熊ヶ谷東遺跡－発掘調査概要－』 同調査団
73 池上・遠藤 1984 『神奈川県横浜市緑区奈良町 奈良地区発掘調査報告Ⅱ』 同調査団
74 鈴木重信 1984 『横浜市港北区矢上上ノ町横穴墓Ｂ支群発掘調査概報』 横浜市教育委員会
75 呉地英夫ほか 1985 『横浜市緑区東方横穴墓群発掘調査報告』 玉川文化財研究所
76 伊東秀吉 1986 「川崎市高津区久末楸谷横穴古墳発掘調査報告」 川崎市文化財調査集録 第22集
77 鹿島保宏ほか 1986 『横浜市神奈川区菅田町 日向根横穴墓発掘調査報告』 横浜市教育委員会
78 呉地英夫ほか 1986 『横浜市緑区東方横穴墓群第２次発掘調査報告書』 玉川文化財研究所
79 田村良照 1986 『川崎市内における横穴墓の調査』 玉川文化財研究所
80 須山幸雄 1987 「日向根横穴墓」 昭和61年度横浜市文化財年報
81 長谷川 厚 1987 「歴史時代墳墓の成立と展開（２）」 古代 第84号

82　横浜市教育委員会　1988　「赤田横穴墓群」　昭和62年度横浜市文化財年報
83　長谷川　厚　1988　『新吉田町四ッ家横穴墓群』　神奈川県立埋蔵文化財センター
84　江坂輝弥ほか　1988　『川崎市史』　資料編１
85　滝沢・林原　1988　『川崎市高津区千年Ｂ区域横穴墓群』　同調査団
86　佐藤安平　1988　『本牧箕輪横穴墓群調査報告書』　同調査団
87　滝沢　亮ほか　1989　『新吉田町四ッ家横穴墓Ｂ群』　同調査団
88　村田・増子　1989　「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基本的研究(上)　川崎市民ミュージアム紀要　第２集
89　田村良照　1990　『横浜市港北区　諏訪下北遺跡発掘調査報告書』　同調査団
90　滝澤　亮　1990　『新吉田町四ッ家横穴墓群』　同調査団
91　坂本・倉沢　1990　「矢崎山横穴墓群」　港北ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ｘ
92　上田　薫ほか　1991　「神奈川県内の横穴墓群」　茨城県考古学協会シンポ関東横穴墓遺跡検討会資料
93　伊東・高橋　1992　「川崎市多摩区東生田横穴墓発掘調査報告書」　川崎市文化財調査集録　第28集
94　林原利明　1992　『神奈川県横浜市港北区　新吉田町俵地区横穴墓』　同調査団
95　小宮・倉沢　1992　『上ノ山遺跡』　港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ＸⅢ
96　村田・増子　1990　「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基本的研究(下)　川崎市民ミュージアム紀要　第３集
97　鹿島・鈴木　1993　「綱崎山横穴墓群」　平成４年度横浜市文化財年報
98　鹿島・鈴木　1993　「横浜市綱崎山横穴墓群の調査」　第17回神奈川県遺跡調査・研究発表会
99　鹿島・鈴木　1992　『平成３年度　神奈川県指定史跡　市ヶ尾横穴古墳群（Ｂ)』　横浜市教育委員会
100　田村良照　1993　「中里横穴墓」　平成4年度横浜市文化財年報
101　村田文夫　1993　『古代の南武蔵』　有隣新書
102　吉田好孝ほか　1994　「横浜市大場横穴墓群Ｆ・Ｇ・Ｈ横穴墓群の調査」　第18回神奈川県遺跡調査・研究発表会
103　田村良照　1994　『横浜市南区中里横穴墓発掘調査報告書』　同調査団
104　小宮・坂上　1995　「ジンザブ横穴墓群」　平成６年度横浜市文化財年報
105　鈴木・武井　1996　『Ｃ18横穴・矢崎山古墳』　港北ニュータウン地域内埋蔵文化財報告XX
106　後藤喜八郎　1996　『川崎市高津区　久本横穴墓群発掘調査報告書』　同調査団
107　村田文夫　1996　「遺跡は地中の語り部」　川崎市史研究　第７号
108　大川・青木　1997　『横浜市鶴見区　馬場３丁目横穴墓群』　日本窯業史研究所報告　第49冊
109　竹石・澤田　1997　「川崎市久地西前田横穴墓群（第2次)」　第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会
110　小池　聡　1997　『川崎市高津区久本桃之園横穴墓群』　同調査団
111　河合・田尾　1997　「遺物から見た律令国家と蝦夷（神奈川県)」　第６回　東日本埋蔵文化財研究会
112　鹿島・山田　1998　『市ヶ尾第二地区18街区横穴墓群発掘調査報告書』　横浜市埋蔵文化財センター
113　須山・廣瀬　1998　「金剛寺横穴墓発掘調査報告」　平成８年度横浜市文化財年報
114　竹石健二ほか　1998　『久地西前田横穴墓群－第１・２次調査－』　同調査団
115　長谷川　厚　1999　『新宮台横穴墓』　かながわ考古学財団調査報告82
116　長谷川　厚　2000　「谷津町北地区横穴墓」　平成10年度横浜市文化財年報
117　野中和夫ほか　2000　『溝口西耕地横穴墓群発掘調査略報』　同調査団
118　長谷川　厚　2000　「瀬戸町横穴墓」　かながわ考古学財団調査報告86
119　岡本・伊丹　2001　『かながわの古代寺院（研究の成果と課題)』　神奈川県考古学会　考古学講座
120　平野・柳沼　2001　『横浜の古墳と副葬品』　横浜市歴史博物館・同市ふるさと財団